



幼児の絵

波多野完治

「絵を描く子どもたち」という映画が評判になっている。これはよい映画である。小学校の一年生が絵をかく話だが、一年生は幼児にちかい性質をたくさんもっているので、幼稚園の先生にも勉強になる。

ぜひみておいて頂きたい。しかし、この映画の中にふくまれている絵画教育の理論は必ずしもウノミにはできない。

フランスのある学者（ボームスタン・エースラー）「アンフアンズ誌」一九五五年十月号）は、画家が子どもの絵に興味をもちはじめたということ自体が、一つの大きな現代の徴候なのだ、といっている。つまり、今日の児童画への関心は、画家の「アブストラクト」とつながっている、というのである。こういう立場からの子どもの画の見方は、二つの点で特長がある。

一つは、子どもの絵を「無意識」とむすびつけることである。人間の心のおくそこにひそんでいる願望や、抑圧された欲求などが、絵をおしてあらわれるという考えである。

第二は、こういう見方の結果として、絵をその画をかけた個人とむすびつける、という傾向である。これをボームスタン・エースラーは「主観主義的傾向」とよんでいる。

「絵を描く子どもたち」の基本傾向が、こういう方向にむかっていることはあきらかだ。

前記ボ氏によると、ソ連にはこれとまったくちがった絵画教育の立場がある。

それは絵を「ペンキョー」の一つとみる立場である。

子どもの認識能力が発展する。その中途の段階で、児童画の諸相ができあがり、またそういう意味で絵をみていくべきだ、とする立場である。

子どもの認識能力は行動から言語へすすむ。前者を感性的認識といい、後者を理性的認識とよぶのだが、画は、子どもが、外の世界をつかむ、そのつかみ方の一つの様相であり、また、画でつかまえる、そのつかまえ方を通して、子どもの外的世界への理解がふかまっていくのでなくてはならぬ、とソ連の児童画研究者は考えるのである。

こういう立場では、子どもの絵は、子どもの主観状態と関係させられるだけでなく、「外的世界」のうつし、反映としてみられなければならないことになる。

子どもの絵を主観的、情緒的にばかりみると、「認識」方面はわからない。また子どもの認識能力を発展させるための役にはたさない。絵を外的世界と関係させつつながめてみる

こと、これが必要だ。つまりこれは絵を「知性」の立場から
みることである。

二つの正反対の立場。このどちらが正しいか。これはむず
かしい問題である。

ソ連の学者は、自分の立場では、主観の方もみられるのだ、
外の世界と、子どもの人格のあらわれと、両方がわかるの
だ、と主張するのだが、同じことは「欲求」という立場から
の児童画論者も主張するのかもしれない。

教育者としては両方の立場を、よく考慮に入れることが大
切だろう。

さて、こういう立場の相違は画の教育の方法にも大きなち
がいをもたらして行く。

欲求派の方では、絵をなおすということとは全く問題外とさ
れる。写生も、小さい子にはむかぬとされる。

お手本などももつての外だ。

ソ連の絵画教育では、お手本は、必要とされる。

問題はこういうお手本がいいか、という点にかかってくる。

ヴォルコフという学者は、ルノアールの

「フランスの博物館がなかったら、わたしの絵はとてもこ
こまでいかなかった」

という言葉をひいて、手本の必要をといっているのである。

写生も大切だ。

なにより重要視されるのは「線」である。線は知性的なも
の故、線を正しくひくことが訓練されねばならぬ、とする。

問題は、幼児に対して、あきぬように、いやにならぬよう
に、線の練習をさせるにはどうすればよいか、という「方法」
の問題になる。で、結局、ソ連では伝統的な絵画教育の方法
が、反省を加えられ、改良されてつかわれる、といえるだろ
う。

う。

さて、そんな風だから、ソ連の子どものかいた絵は、つま
らぬものばかり多いのだ」と欲求派の人はいうかもしれない。

ソ連の学者にいわせると、子どもの絵がつまらぬか面白い
かはそれほど大切なことではない。問題は、子ども時代の面
白さが、大人にまでもちこされるように教育できるかどう
か、ということになる。

今までのすぐれた画家たちの手法をマスターした人のみ
が、二十世紀後半のすぐれた画家になりうる。

今までの手法をすててしまつては、よい画はかけぬ、と考
える。

「無意識」を重視する点にも、ソ連では反対がある。

無意識はなるほど精神病者においては重要かもしれない。
しかし、人間において大切なものは「意識的」「意志的」「意
図的」な作業なのであり、それが中心でなければならぬ。

無意識を重要視するのは、人間の要素のうち、ごくつまら
ぬものに目をむけて、それを拡大して考えているのではない
か、というのである。

こんな風に、おたがいに対立しすぎていてはこれを統一す
るのは骨がおれる。オイソレと一つにはまとまらない。

しかし、「絵を描く子どもたち」の立場だけが、唯一のも
のではない、という反省をもつことは、日本の幼児教育の場
合、大切なことではなからうか。

「絵を描く子どもたち」のような立場が、日本では必要であ
り、日本の子どもは、不当におさえつけられている。ソ連で
は子どもはもっとずっと解放されている。だから、そのよう
な立場の存在は、日本では意味があるのだが、しかし、日本
の絵画教育が、これ一色になるのはどうか、とおもわれる。